

C I S M O R V O I C E 8

Spring
2008

2-3

CISMOR国際ワークショップ2007

4-11

特集 ヨーロッパ

ドイツの宗教事情

嶋田律之

フランスの宗教事情

竹下節子

現代英国の宗教事情

—多民族都市バーミンガムから見た風景—

中野泰治

フォトギャラリー

12-13

CISMOR夏期研修プログラム報告

14-15

スタッフ紹介

16-17

第3回CISMORユダヤ学会議報告

18

研究会報告

19

CISMORインフォメーション



C I S M O R

Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions

「イスラームと西洋 ―アメリカの外交思想を検証する―」

日時：2007年10月20-21日

会場：新島会館

「9.11」とその後のイラク戦争は、アメリカとイスラーム世界との対立であり、アメリカの対中東政策と密接に関係している。今回の国際ワークショップは、アメリカの外交思想を手がかりにして、「イスラームと西洋」の関係を検証することが目的であった。

今回招聘した4名の研究者のうちのお一人であるフランシス・フクヤマ氏（ジョンズ・ホプキンス大学教授）は、いわゆる「ネオコン」のイデオログの一人として、アメリカの中東外交思想について積極的に発言を行ってきたが、近著『アメリカの終わり』（*America at the Crossroad*）において、ブッシュ政権のイラク政策を批判し、「ネオコン」から距離を置いたと言われている。

アメリカのイスラーム世界に対する外交戦略に対して、イスラーム世界から二人のご意見を伺うことができた。お一人は、イランのバーゲル・アル＝オルム大学のイスラーム学者であるアフマド・ヴァーエズィ学長であった。二人目のイスラームからの代表者であるターリク・ラマダーン氏は、ヨーロッパのイスラームを代表する研究者であり活動家である。もうお一人の発表者であるノーマン・G・フィンケルシュタイン氏は、パレスチナ・イスラエル問題についてのアメリカを代表する研究者であった。

フクヤマ氏のネオコンとブッシュ大統領に対する批判は、一国主義を肯定したことと、短期間にイラクを民主化するために武力行使を行ったことに向けられた。アメリカの外交戦略において、相手を十分に理解することと、十分な時間を外

交交渉などにかけることが必要であるとして、ネオコンの外交戦略を批判したが、『歴史の終わり』で展開した「自由民主主義」（liberal democracy）が最上の政治形態であり、これを世界において実現することが必要であるという氏の主張は、まったく揺らぐことはなかった。もう一つ明らかになったことは、氏の自由民主主義についての主張が「近代化論」として展開されているということであった。その意味において、ブッシュ大統領やネオコンと戦略は異なるものの、「自由と民主主義」の実現という目的においては一致していると言えるだろう。

これに対して、イスラームの立場から、ヴァーエズィ氏とラマダーン氏は自由民主主義に対して、またフィンケルシュタイン氏はアメリカのパレスチナ・イスラエル政策に対して厳しい批判を展開した。イスラームの二人の代表はフクヤマ氏の主張する「自由民主主義」の本質を的確に見抜いていた。すなわち、それは近代化の行き着くところであり、近代化の特徴は「世俗化」（非宗教化）であるという点である。「自分たちは民主主義を尊重するが、自由民主主義は一つのイデオロギーだ」というヴァーエズィ氏の発言は興味深いものであった。

アメリカとイランのあいだに国交がない状況で、イランのイスラーム法学者とアメリカを代表する政治思想家が、厳しい中にも相互に信頼を置きながら議論できたことは、日本において一神教研究を行うことの利点を実現した一つの好例であったと言えるだろう。

（同志社大学大学院神学研究科 森 孝一）



10月20日(土)

第1セッション

「アメリカの中東政策を検証する ―アメリカからの分析―」

司 会：小原克博（同志社大学）

発 表：フランシス・フクヤマ（ジョンズ・ホプキンス大学）

「アメリカの中東政策を検証する ―アメリカからの分析―」

コメント：森 孝一（同志社大学）



第2セッション

「アメリカの対イラン外交を検証する」

司 会：中田 考（同志社大学）

発 表：アフマド・ヴァーエズィ・ジャゼイー

（バーゲル・アル＝オルム大学）

「アメリカの対イラン政策の問題点」

コメント：松永泰行

（同志社大学一神教学際研究センター客員フェロー）



10月21日(日)

第3セッション

「アメリカの中東政策を検証する ―イスラーム世界からの分析―」

司 会：中田 考

発 表：ターリク・ラマダーン

（オックスフォード大学セント・アントニーズカレッジ、ロカヒ財団）

「アメリカの中東政策を検証する ―イスラーム世界からの分析―」

コメント：臼杵 陽（日本女子大学）



第4セッション

「アメリカのパレスチナ・イスラエル外交を検証する」

司 会：小原克博

発 表：ノーマン・G・フィンケルスタイン（政治学者）

「アメリカの中東政策のルーツ ―ウォルト／ミアシャイマー理論の批判―」

コメント：村田晃嗣（同志社大学）



ドイツの宗教事情

嶋田律之
しまだ のりゆき

同志社大学大学院文学
研究科哲学・倫理学専攻
修士課程修了。ドイツミュ
ンヘン大学神学部博士
課程修了。Dr. Theol.
現在、日本キリスト教団向
日町教会伝道師。専門は、
ドイツ神学、哲学。



2006年10月31日、ドイツチュー
リンゲン州エアフルトにあるアウグス
ティーナ修道院の墓地で、73歳の引退
牧師が焼身自殺を遂げた事件がドイツ宗
教界を揺るがした。その日はルターが
ヴィッテンベルグ城教会の扉に95か条
の論題を張り出したとされる事を記念す
る宗教改革記念日であり、そして、この
修道院こそは、かつてルターが入ってい
たところでもあった。それはまさにそこ
で、しかも、その記念礼拝が行われてい
る最中の出来事であった。彼の遺書と生
前の言動から、自殺の原因はドイツにお
けるイスラーム勢力の拡大への不安とそ
れに対する教会の態度の曖昧さへの抗議
と言われている。

現在、ドイツ全土では、主に戦後トル
コから招かれた労働者達とその家族を中
心とする350万人のムスリムがいる。そ
れは、ドイツの人口8,250万人の約4%
に当たる。他には、カトリック教徒が
2,590万人で31.5%、ドイツ福音主義教
会（プロテスタント）の信徒が2,570万
人で31.1%、正教会と他のキリスト教は
140万人で1.6%、その他と無宗教が2,940
万人で35.6%である。数的には、確か
に、いまだドイツにおけるムスリムは少
数ではあるが、その数は戦前はゼロに等
しかったのだ。そのようなムスリムたち



ボンのムスリム女性(撮影:小原克博)

によって、1970年代後半からモスク建
設の声が高まり、今や全国に1,200以上
のモスクがある。そして、それらの多く
は近隣住民の反対運動を伴っている。ま
た2006年7月にバーデン・ヴュルデン
ブルグ州政府が敗訴したスカーフ着用
のムスリムの教師の採用拒否問題など、
イスラーム勢力がひととき目立つよう
になっている。しかも、2001年の「9.11」
のテロが起こり、さらに、ドイツはその
アル・カーイダメンバーの何人かの潜伏
地であった事からも、イスラーム勢力の
ドイツ社会への「統合 (Integration)」
政策の問題がくり返し論議されている。

他方で、ドイツのイスラーム勢力の側
でも、「9.11」を境に、「統合」へ向けて、
少しずつ変化が起こっているように思わ
れる。その勢力の一つであるドイツイス
ラーム中央協議会 (ZMD) は、2002年
2月に「イスラーム憲章」を発表した。
この憲章は、ドイツにおけるムスリムが
ドイツの憲法と法の下で、ドイツ社会の
中へいかに「統合」していくべきかを述
べている、ドイツイスラーム勢力の最初
の態度表明である。この憲章は21条か
らなるが、興味あるのは第20条に、尊
厳あるムスリムとしての生活のために実
現すべき具体的な課題も掲げられてある
点である。それは、公立学校でのイスラ
ームの宗教授業、大学でのイスラーム講
座の開設、市内部におけるモスクの建設
、拡声器を使つての礼拝時刻を告げるム
エツィーンの許可、役所、学校でのイス
ラーム的服装を認めさせる事、公共放送
の監督委員会へのムスリムの参加、先の
スカーフ判決を認めさせる事、ドイツ軍
におけるイスラーム従軍聖職者、病院や社



ミュンヘンにある聖ルカ教会(プロテスタント)。この教会では瞑想などの新しい要素を積極的に取り入れた礼拝、集会が行われている。(写真提供:1bit旅写真素材 <http://1bit.zipang.to/>)

会福祉施設におけるイスラーム的サービ
ス、二つのイスラーム休日を国家的に保
証する事、イスラームの墓地の建設、で
ある。

これに依えて、ドイツ福音主義教会
(EKD) は2003年1月に声明を発表し
ている。それによると、この憲章をムス
リムの対話への努力として、大いに歓迎
の意を表していると同時に、批判点も挙
げている。それは、第1に、この憲章に
はドイツキリスト教会の関係についての
言及が欠いている事。そして、この憲章
では、しばしば、イスラーム世界の問題
とされる「女性の地位の平等」が十分に
言及されていないこと、そして最後に、
イスラーム的な貧富の考え方の違いが指
摘されている。

これ以降、この両者の対話は続けられ
ているが、困難さをも伴っている。2006
年11月に、EKDはすでに2000年に発
表していた「ドイツにおけるムスリムと
の共生」と題した指針に加えて、「明快
さと良き隣人 ドイツにおけるキリスト
者とムスリム」と題した指針の第2版を
出している。ところが、これに対して、
先のドイツにおけるイスラーム中央協
議会と更に他の3団体とで新たに構成さ
れたイスラーム調整協議会 (KRM) (約
318,000人) は、昨年2007年5月に非常
に批判的な声明を発表している。その批
判点は、第1にEKDがドイツのイスラ
ーム社会、家庭の中に、イスラームの罰概

念に由来する暴力容認の傾向があるこ
と、またやはり女性の地位の低い事を指
摘している点へと向けられている。彼ら
によれば、これらの点は全てのムスリム
に当て嵌まるのではなく、そのような十
把一からげなイスラーム理解は許されな
いと言うのである。また、他の個々の批
判と並んで、ドイツ社会では、イスラ
ーム団体はいまだ「協会 (e.V.)」という
任意団体としてしか認められておらず、
それに対して、EKD並びにカトリック
教会は、憲法第140条にある「公法上の
社团」(Körperschaftsstatus) として事
実上、国家的な資格が与えられ、またそ
れに基づいて、憲法第7条3節における
公立学校における教会による宗教教育が
保証されている、という「不公平」があ
ると訴えている。総じて、この声明では、
これまで対話的に培ってきたEKDとの
関係が著しく後退したことが表明されて
いる。

ドイツにおけるイスラーム勢力の拡大
とそれへの不安は、他方で、キリスト
教会の弱体化をも表しているであろう。
EKDは2007年1月に「21世紀の教会」
というスローガンの下に、教会未来会議
を開催した。しかし、その実質は、概ね
教会のリストラ計画である。1983年か
ら2003年までの間に、390万人の人が
EKDから脱会している。再入会者はあ
るものの、この脱会傾向と人口推移から
予測すると、EKDの教会員数は2030年
には現在の2,600万人から1,700万人へ
と、また教会税の収入も40億ユーロ (約
6,400億円) から20億ユーロ (約3,200
億円) へと減少するという調査結果が出
ている。それゆえ、この人数に合わせた
教会運営が強いられると言うのである。
具体的には、州教会 (教区) の合併、教
会の合併、それに牧師と、教会、教会の
社会福祉施設、幼稚園などの従事者の削
減である。これによって、現在、一人の
牧師が平均1750人の信徒を担当してい
る上に、更に増えるという事になる。

以上、これらの問題はEKDばかりで
なく、もちろん、ドイツカトリック教
会の問題でもある。確かに、信徒数は
EKDと比べて変動は少ない。しかし、
私のミュンヘンに住む友人がいつもこぼ

しているように、聖職者になる人の数が
ドイツでは圧倒的に減少してきており、
市内で一番多くの礼拝出席を誇る教会で
も、何週かに一度はインド人の聖職者に
よる礼拝となっているそうである。バイ
エルン州都ミュンヘンでさえそうであれ
ば、農村部へ行けば更にひどく、一人の
聖職者が幾つもの教会をかけもちしなけ
ればならない。また、カトリック教会と
イスラームの関係も、近年問題となった
ローマ教皇ベネディクト16世 (バイエ
ルン州出身) のイスラームへの誤解をひ
き起こす発言などによって、さらなる良
好な発展を見込む事は難しい状況にある
ように思われる。

このような状況の中で、ドイツの宗教
事情で新しい動きをあげるとすれば、す
でに定着しつつある多くの人々の禅へ
の関心、あるいは、仏教への関心であ
る。2007年7月のダライ・ラマのドイ
ツ訪問は多くの人をひきつけた。雑誌
「シュピーゲル」(2007年29号) によれ
ば、「最も気持ちの安らぐ宗教は何です
か?」という質問に43%の人が仏教と
答え、41%のキリスト教よりうまわった。
同じく、「だれが模範となる人物か?」
という質問に、ローマ教皇ベネディクト
16世が42%だったのに対して、ダライ・
ラマは44%というアンケート結果が出
ている。それゆえに、カトリック教会そ
して、プロテスタント教会もまた、仏教
的、禅的瞑想要素を取り入れ、あるいは
発展させようという傾向がある。EKD
は、現在33の修道院あるいは類似する
宗教施設をもっており、それらは、宗教
改革時代にルター派へと改宗し、その後
多くは使われなくなっていた施設である
が、今、これらの施設を改修し、霊性へ
の覚醒と安らぎを与える場として、再活
用しようという計画もある。

先に述べた、ドイツEKDの未来会議
では、霊性として宗教を求める人々の増
加の社会状況と、教会内でいわゆるボラ
ンティアで奉仕する教会員の中に、教会
再生の希望があると謳われている。しか
し、このことがどこまで教会離れを食い
止めることができるかは分らない。ドイ
ツの教会は今や大きな曲がり角にあると
言える。

現代英国の宗教事情

—多民族都市バーミンガムから見た風景—

中野泰治

なかの やすはる

バーミンガム大学大学院神学宗教学研究科
PhDコース在籍。専攻は
Quaker Studies。特に17
世紀のクエーカー神学者
Robert Barclayの思想を
中心に研究。



最新の国勢調査（2001）では、英国人の71.8%、4,100万人がクリスチャンとの結果が出ており、イスラームやヒンズー等の他宗教の信徒5.4%、無宗教の15%と比べて、依然として英国はキリスト教国であることが確認された。しかし実際にはこうした調査では単なる習慣でクリスチャンと答える人も多く、国教会、メソジスト、バプテストといった伝統的な英国（北アイルランド除く）の教会を訪れてみれば分かるように、他のヨーロッパ諸国と同様、戦後以降の信徒数の減少と教会出席率の大幅な低下により教会内部の風景は非常に寂しいものとなっている。増加傾向を示すの

ランドで6.3%)。キリスト教はもはや大方の英国人にとって重要な生活要素でなくなり、十分な教育を受けた人々さえも宗教の初歩的なことを知らず、単に宗教＝戦争というマイナスイメージを持つ者も少なくない。また自らを宗教的と考える人々の間でも信仰の個人化が進み、Grace Davie の言葉を借りれば、“believe without belonging” という状況にある。この状態が進展すれば、組織としての国教会やメソジストは2030年頃までに消滅すると論じられるほどである。実際、私が通うクエーカー（フレンド派）の集會もそうした世間の状況を如実に反映しており、その特殊な宗教性や歴史を考慮

に入れる必要があるが、元来の信徒数の少なさに加えて信徒の高齢化により、お世辞にも活発な状況とは言えない。彼らも多少なりとも危機感を抱いているようで、地域向けの勉強会を開くなど幾つかの

試みを行っているが、集会を個々の人生の Spiritual Journey を探求する場として提示するのみで、沈黙の礼拝の中でなされる感話の内容も宗教的というよりも個人的もしくは社会運動に関するものが多い為、教会としてのアイデンティティが見えづらい。他の主流派教会がまだ強い社会的影響力を持った時代には価値の多様性を認めるクエーカーの集会はある

種の人々(New Ager 等)の避難所となったであろうが、英国社会そのものが(建前にしろ)多元的なあり方を是とするようになった現在、人々の目には特に魅力的とは映らないのかもしれない。この秋にも近隣の大学の新入生に来てもらおうと大学のチャブレンと協力して歓迎集会を開いたが、残念ながら誰一人来なかった時の彼らの寂しげな笑顔が非常に印象的であった。

こうした著しい衰退傾向を示す主流派のキリスト教とは対照的に、ロンドンや私が暮らすバーミンガムといった都市圏では中東、南アジア、アフリカ諸国からの移民の増加により、ムスリム、ヒンズー教徒、シーク教徒等の社会的プレゼンスがその実数以上に大きく見える。バーミンガムは英国を代表する多民族都市であり（Non-White30%、英国全体では8%）、街中を歩くと別の国かと錯覚するほどに様々な人々を見ることができる。特にムスリムの割合が他の都市と比べて高く最新のファッションで楽しそうに街を闊歩する若者の姿、また一方で大学の研究室や礼拝所で欠かさずお祈りする学生の姿が印象的である。近年の英国は、多元主義、多文化主義を英国の経済的文化的繁栄の源泉と捉え、いわば国是として掲げてきた。実際、政治、行政、教育の各分野においてマイノリティに対する様々な配慮が行われており、高度な職業や公的な地位に就く者も少なくない。また経済界も、低コストという現実的な理由があるにせよ、移民労働者の質を高く評価



筆者がいつも通うShelly Oak地区のクエーカー集会所の掲示板(筆者撮影)

している。移民の側もこうした英国社会の寛容性を称賛しており、今回年末の忙しい中インタビューさせてもらったヒンズー教やシーク教の関係者も同様に感謝の言葉を述べていた。これは私の周りのマイノリティの学生からも聞かれた意見でもある。こうした理想的に見える英国の多元的社会が問題ないものかと問われれば、残念ながら Yes と答えることは難しいだろう。

2005年7月7日のロンドン同時爆弾テロはまだ記憶に新しいことと思われるが、ここバーミンガムもテロとは無縁ではなく、同月9日中心街で不審物が発見され、市民3万人が避難する騒ぎが発生している。2007年1月にも、バーミンガム大学の近辺で裏切り者としてムスリム英国軍兵士の誘拐殺害を謀ったとの容疑でパキスタン系英国人9人（1人はパキスタン国籍）が拘束された。英国のテロでは、容疑者とされた人々はこの国で生まれ育ち、教育を受けた二世の英国人であったことが国民に大きな衝撃を与えたが、それ以来依然として英国社会は何故という疑問を解消できていないのが現状であろう。南アジアで長年Peace Movementを担当する或るクエーカーも「これまで以上に相互理解を促進することが重要」と語りつつも、（イスラームに限らず）原理主義者が安易に暴力に訴えることに深い戸惑いを覚えるとの心情を吐露してくれた。こうした対立はWhite対Non-Whiteのみではない。2005年10月、バーミンガム北部のHandsworth-Lozells地区でパキスタン系とアフリカ・カリブ系ギャングとの間に暴動が起き、警官を含めた数名の死傷者を出したが、これも長年の人種的経済的対立が背景にあったとされている。英国に暫く滞在すると気付くことだが、政治家やメディアの表向きの多元主義、寛容政策の言葉とは裏腹に、人々はそれぞれの宗教、文化、人種ごとに別れて生活しており（大学のキャンパスでも同じ傾向が見られる）、英国社会はこれまで相互不干渉、無関心を貫くことで何とか衝突を避けてきただけではとの印象を受ける。移民のバス運転手や通行人に指を立て嘲笑し、石を投げる小中学生。それを

見て見ぬふりをする大人達。これは場所によってはよく見る風景であるが、子供は正直だなと思いつつ、彼らは社会の鏡なのだと思感する場面である。その意味で、現在の宗教的文化的対立はテロを契機に生じたというよりも、これまで覆い隠されてきた英国社会の潜在的な歪み、対立関係が顕在化した一つの例なのかもしれない。国の人口調査（2004）で、特にムスリムの教育レベルの低さ、失業率の高さが明らかになっている（男13%、女18%、英国全体ではそれぞれ5%、4%）。もちろん性急な判断は避けるべきであるが、周りのムスリムの留学生の意見としては、英国人として生まれ育ったにもかかわらず、厳然として存在する社会的な不公平や格差に対する不満がテロの背景にあるのだらうということであった。

MORIの調査（BBC News, 2007年12月10日）によると、国民の62%が大戦以来の最大の脅威に晒されていると回答している。こうした国民意識を背景に、政治家やセキュリティ関係者は脅威の増大を口実に反テロ法を強化し、警察の権

パーセント	Male	Female
キリスト教徒	4.3	3.7
ムスリム	13.5	18.0
ヒンズー教徒	5.3	8.2
シーク教徒	7.0	5.7
ユダヤ教徒	3.1	3.5
仏教徒	7.5	9.2
その他	7.8	6.0
無宗教	6.7	6.0
全体	5.1	4.3

出典: *Annual Population Survey, January 2004 to December 2004, Office for National Statistics*

限を拡大し、現在も起訴なしで拘束できる期間を最大 56 日（現在 28 日）にまで延長する法案を提出している。過激派はあくまで一部であるにもかかわらず、イスラームそのものを危険視する人々も多く、これまでも潜在的に存在していたイスラーム—非イスラーム間の心理的溝が一層深くなったのが見て取れる。こうした社会のネガティブな態度は、ビザ発行や入国審査の際に特に明らかであるが、我々日本人を含めた他の移民や滞在者にも向けられることもある。もちろん他方で宗教間の相互理解をさらに促進させ

ようとり組む多くの市民団体や教育機関も存在し、最近では政府も過激派のイデオロギーだけにターゲットを絞り、穏健派ムスリムに対するこれまでのアンフェアな扱いを反省し、モスクやその他宗教の組織・学校等と協力して問題解決に当たろうとする姿勢も出てきている。英国社会は日本以上に建前と本音を使い分ける社会であり、新参者である私にとっては、彼らの言葉がどこまでが建前でどこまで本音なのか分からず翻弄されることもままある。英国は伝統的に「二つの国民、三つの階級」と呼ばれる階級社会であり（その外部に移民社会があり、移民の中にもそれぞれ序列付けが見られる）建前と本音はそうした社会で生きていく上での一種の知恵なのだろうが、社会的弱者を言葉巧みに追い込む方便になることも多い。かつて商業・産業革命によって新興勢力が登場した際、「氏としての Gentleman」から「教養としての Gentleman」概念へと変化させることで上流階級への道を広げ、そうすることで彼らをうまく取り込み、旧来の社会構造を維持することに成功した英国社会は、従来の国家概念を否応なしに解体をしていく現代のテロの問題、移民とその宗教の問題等に関して今度はどのような戦略に出るのだろうか。非常に興味深いところである。

参考文献·URL

Grace Davie, *Religion In Britain Since 1945: Believing Without Belonging* (Oxford: Blackwell, 1994).

Grace Davie, Paul Heelas, and Linda Woodhead (eds.), *Predicting Religion: Christian, Secular And Alternative Futures* (Aldershot: Ashgate, 2003).

Monica Furlong, *C of E: The State It's In*, (London: Hodder & Stoughton, 2000).

村岡健次、川北純編著『イギリス近代史 [改訂版]』ミネルヴァ書房、2003年。

BBC, UK security policy 'out of date'
http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/7133508.stm (10 December 2007, Accessed 11 January 2008).

Christian Research, The results of the English Church Census 2005.
<http://www.christian-research.org.uk/2005census.htm> (Accessed 11 January 2008)

Ipsos MORI, Three In Five 'Believe In God'
<http://www.ipsos-mori.com/polls/2003/bbc-heavenandearth.shtml> (9 September 2003, Accessed 11 January 2008).

Office for National Statistics, National Statistics Online-Focus on Religion
<http://www.statistics.gov.uk/focuson/religion/> (Updated 10 October 2006, Accessed 11 January 2008).

Tearfund, Churchgoing in the UK
<http://www.tearfund.org/webdocs/Website/News/TAM%20Final%20Version%208.5.07.pdf> (April 2007, Accessed 11 January 2008).



ケルン大聖堂（ザント・ペーター・ウント・マリア大聖堂）（ドイツ）

（撮影：三戸部順子）



サントクロワ教会（聖十字架教会）内陣（フランス）

（撮影：三戸部順子）

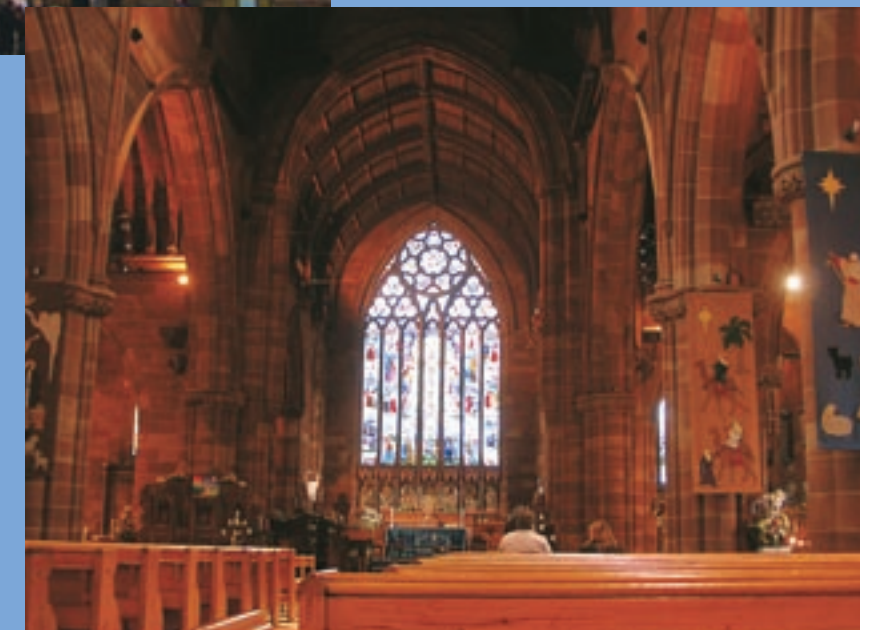
ノートルダム大聖堂（フランス）

（撮影：澤村容子）



セント・マーティン教会（イギリス）
バーミンガムで最も古いとされる英国国教会の建物

（撮影：中野泰治）



セント・マーティン教会内部（イギリス）

（撮影：中野泰治）

シリア異文化 研修プログラム

(2007年8月2-14日)

森本典子

同志社大学大学院
神学研究科博士後期課程



アレppoのレストランにて。築300年以上の
建物の中庭も客席として使われている。

イスラエル 夏期研修 プログラム

(2007年8月12-22日)

北村 徹

同志社大学大学院
神学研究科博士後期課程



古代ユダヤの町ツィボリの遺跡。

マレーシア 夏期研修 プログラム

(2007年8月21日-9月2日)

原田恭介

同志社大学大学院
神学研究科博士後期課程



マラヤ大学日本語学科の学生たちと。

2007年8月2日から14日にかけて、シリアにおける異文化研修プログラムに参加した。研修の目的は、シリアにおける宗教の歴史と現在の宗教事情を講義や史跡訪問などを通して学び、理解を深めることであった。

初めの数日はダマスカス市内に滞在し、同志社大学神学部・神学研究科と学術交流協定を結んでいるクフタロー財団アブヌール学院での講義を中心に、シリアにおけるイスラームとキリスト教についての学びを深めた。

8月6日から5日間をかけて、シリア北部と沿岸地方を回り、シリアにおける宗教の歴史を、遺跡を見学しながら学んだ。自らもシリアの考古学研究に携わり、博士論文を執筆中である男性が専属のガイドとして同行してくださったので、それぞれの遺跡について細かな説明を受けることができた。古いものは紀元前15世紀にまでさかのぼる遺跡をこの目で確認し、その遺跡に関する講義を現地で受ける機会に恵まれたことは本当に幸いであり、有益であった。

道に迷えば目的地まで連れて行ってくれる若者。思わぬ予定変更を余儀なくされたとき、真剣に理由を説明してくれるバスドライバー。ふらっと訪れた客にアラビアのロレンスが滞在した部屋を見せてくれるホテルマン。物言わぬ遺跡だけではなく、研修中や自由時間に多くの親切で誠実なシリアの人々と触れ合うことができたことも思い出深い。

アブヌール学院の方々をはじめとする、多くの方々の助力によりこの研修旅行が学びが多く快適なものとなったことを感謝している。



ウガリット遺跡にて。

研修の日程は以下の通りである。

8月2日 関西空港出発。
8月3日 ダマスカス空港到着。シャイフ・アフマド・クフタロー財団アブヌール学院訪問。金曜日の礼拝に参加。シリア博物館見学。ブックフェア視察。
8月4日 アブヌール学院にて講義。クフタロー財団付属児童養護施設「慈悲の家」訪問。ダマスカス旧市街、ウマイヤドモスク視察。カシオン山見学。
8月5日 ダマスカス旧市街キリスト教地区訪問。聖アナニア教会、アルメニア教会見学。長老派教会にて講義。マアラー訪問。
8月6日 パルミラへ移動。パルミラ博物館、パルミラ遺跡見学。デリゾールへ移動、デリゾール橋視察。
8月7日 ハラビア&ザラビア、ラッカ、カールト・ジャバル見学。アサド湖視察。アレppoへ移動。
8月8日 聖シメオン教会、Dead Cities見学。考古博物館見学。アレppo市内見学。
8月9日 サラディーン城、ウガリット見学。ラタキアへ移動、ラタキア市街視察。
8月10日 アルマルカブ城、アルワード島、タルトゥース博物館、アムリット見学。サフィータへ移動、教会見学。
8月11日 サフィータタワー、クラック・デ・シュバリエ、スレイマン砦見学。ダマスカスへ移動。
8月12日 シャハバ、スウェイダー、ボスラ訪問。
8月13日 アゼム宮視察。ダマスカス空港へ移動。
8月14日 関西空港着。

本プログラムは宗教的多元社会、特にセム系一神教（ユダヤ教・キリスト教・イスラーム）が共存するイスラエルの現状に触れ、その宗教的現実に対する理解を深めることを目的とするものであった。昨年もこのプログラムは予定されていたが、レバノンとの交戦状況を受け、やむなく中止となった。今年は一応平穏を取り戻し、神学研究科のコヘン教授の引率のもと、つつがなく終了した。

参加した学生は後期課程の在籍者を中心に8名であった。各々の専攻はヘブライ語聖書（旧約聖書）、新約聖書、イスラーム、考古学、ユダヤ教、キリスト教、エジプト学など多岐に渡ったが、各々に収穫があったことは、イスラエルと各一神教とのつながりの深さ、そしてその歴史の厚みを物語るものであろう。スケジュールは以下の通りである。

8月12日 関西空港を出発。
8月13日 エルサレムの旧市街周辺散策。
8月14日 ヘブライ大学、トルーマン研究所、イスラエル博物館、書物の神殿訪問。
8月15日 ベングリオン大学、ベドウィンの文化博物館、キブツ・ツェエリーム訪問。
8月16日 死海、クムラン、マサダ、キブツ・エンゲディ訪問。“イスラエルとパレスティナの肉親を奪われた親たちのフォーラム”と交流。
8月17日 ヤド・バシエム、ホロコースト記念館、エイン・ケレムの修道院訪問。
8月18日 ガリラヤ湖、キブツ・エンドール、テル・レヘシュ、ゴラン高原訪問。
8月19日 受胎告知教会、ツィボリ、ウサフィーヤにあるドゥルーズの共同体を訪問。
8月20日 ハイファ大学訪問。
8月21日 ヒブリューユニオンカレッジを訪問。
8月22日 帰国。

今回の研修旅行において私が最も印象的だったのは、ひとつはハイファ大学でのアラブ系の人々の受容、もうひとつは“肉親を奪われた親たちのフォーラム”によるスピーチだった。詳細な割合は記憶に定かではないが、ハイファ大学はイスラエルの大学の中では最もアラブ系の学生が多いとのことで、レバノンとの交戦の際、学内は緊張状態にあったが、お互いの話し合いなどを通じて共生を確認したとのことだった。イスラエルとパレスチナの両側から構成されるフォーラムの方々は、肉親を失ったにも関わらず共存することの重要性を強調されていた。そのためには直接に相手に会い、互いに相手を知ることが重要であると語られていた。

お互いの物語には、消し去ることの出来ない怒り、癒されることのない悲しみがあるだろう。そのことを抱えつつ、お互いの物語を重ねて行こうとする人々の姿勢には重いものがあった。相互理解を通して怒りと悲しみを乗り越えようとする彼らの努力を覚えることは、日本に住む我々においても大切なことだと思われる。



ヘブライ大学の学生たちとの懇談。

CISMORマレーシア夏季研修が、2007年8月22日から9月2日にかけて行われた。研修の主たる目的は、マレーシアにおけるイスラームの理解とマレー語能力の向上である。研修の大半は、マレーシア国際イスラーム大学（IIUM）で行われた。研修プログラムは、NGO・東アジアおよび太平洋地域イスラーム宣教評議会（RISEAP）のコーディネートにより実現した。

IIUMではイスラームに関する授業とマレー語の授業の双方が行われた。イスラームに関しては、一例を挙げると、国教の地位を占めるイスラームと、多民族国家の柱である多文化主義の間に存在する様々な問題が議論された。マレー語に関しては、参加者のレベルに応じて二種類のクラスが開講され効果的に学習することができた。

本研修の特徴は、それぞれの学生が任意で研究・調査を行えるようプログラムが柔軟に調整された点である。マレー語による研究発表及び啓示人文学部教授陣とのディスカッション、国際イスラーム思想・文明研究所（ISTAC）における討論会、イスラーム解放党（HTI）の幹部へのインタビュー、マレー人家庭体験ホームステイなどがその例である。

研修を通じて参加者はマレーシアの文化を肌で感じることができた。鑑賞したマレー舞踊は華麗で洗練されたものであり、マレーシア文化の奥の深さにあらためて気付かされた。研修の最終日の前日にはマレー式の結婚披露宴に参加する貴重な機会に恵まれた。披露宴はモスク付属の集会所で催されたが、招待客と新郎新婦の距離が非常に近く終始アットホームな雰囲気であった。

本研修は、学問的にも異文化体験としても非常に充実したものであった。

日程
8月21日 クアラルンプール到着。
8月22日 オリエンテーション、マレーシア・ムスリム福祉協会（PERKIM）訪問。
8月23日 IIUMにて授業、マレー舞踊鑑賞。
8月24日 IIUMにて授業、HTI幹部へのインタビュー。
8月25日 ブトラジャヤ（新首都）見学。
8月26日 ホームステイ。
8月27日 IIUMにて授業、ISTACにて討論会、マラヤ大学の日本語専攻の学生との交流会。
8月28日 IIUMにて授業。
8月29日 IIUMにて授業。
8月30日 マレー語による研究発表、修了式。
8月31日 独立記念日、クアラルンプール市内自由行動。
9月1日 マレー式結婚披露宴に参加。
9月2日 出国。



PERKIMのスタッフたちと。



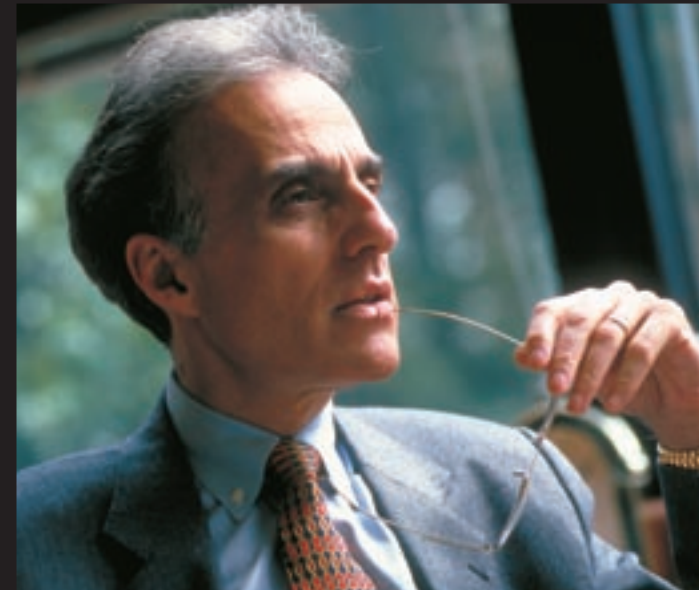
ターリク・ラマダーン

スイスのジュネーブ大学において、哲学ならびにフランス文学にて文学修士号を、またアラブ・イスラーム研究で博士号を取得。エジプト・カイロのアル・アズハル大学では、諸学者よりマンツーマンで教育を受けた。

ノートルダム大学教授、ジョアン・クロック研究所教授を歴任。現在、オックスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジの主任研究員を務める。著作や講演を通じて、「西欧世界におけるムスリム」、「イスラーム世界における宗教復興」に関する議論に大いに貢献してきた。学術的にも、また草の根レベルでも意欲的な活動を見せ、世界中で社会正義と文明間の対話を説いている。

ヨーロッパのシンクタンクである「ヨーロッパ・ムスリム・ネットワーク」(EMN、ブリュッセル)の会長でもある。

(CISMOR国際ワークショップ2006プログラムより抜粋)



ジョン・L・エスポジト

私の仕事の中で最も重要なものは、アルフリード・ビン・タラール王子設立ムスリム・クリスチャン理解センターのセンター長としての務めです。更なる情報については、ウェブサイト<http://cmcu.georgetown.edu/>をご覧ください。

また、私は多くのプロジェクトに関わっています。そのうちの二つは、オックスフォード大学出版局のものです。ひとつは、2007年11月に始まった、私が編集長をしているOxford Islamic Studies Onlineです。これには、3000を超える記事、地図、イラスト、王朝表、人口統計表、歴史年表、用語解説、ウェブサイトへのリンクを含みます。二つ目は*The Oxford Encyclopedia of the Islamic World*(5巻)で、2008年に出版されます。

私の重要なプロジェクトの一つは、ギャラップ社と共同で、上級研究員として関わっている、ムスリム社会の調査です(<http://www.muslimwestfacts.com/>)。ギャラップ社は、今までに行われたムスリムの世論の研究において、最大かつ最も綿密な成果を挙げており、ムスリム社会の人口の90%以上を対象としています。この前例のないムスリム社会の調査は、中東、北アフリカ、アジア、ヨーロッパ、サハラ以南のアフリカ、中央アフリカなど世界40カ国近くの1億人以上のムスリムの意見と願望とを反映しています。また、ギャラップ社のダリア・モガヘド氏と、*Who Speaks for Islam? What a Billion Muslims Think*を著しました。この本では、西洋、民主主義、政治的かつ経済的発展、過激思想、ジェンダー等に対するムスリムの態度を扱っています。

私は世界経済評議会との仕事も続け、100人の指導者達からなる実行委員会のメンバーです。加えてジョージタウン大学、西洋―イスラーム宗教間対話、国連の「文明の協調」共同主催プロジェクトにも関わり、その中心メンバーとして働いています。また、世界的な急進化とテロリズムに関与するいくつかのプロジェクトのメンバーでもあります。

村田幸子

光陰矢の如し。回儒研究に没頭して気がいたら12年が過ぎていた。しかし、王岱輿や劉智等の学問の深さに脱帽しない日はない。Chinese Gleamsの出版直後から、研究仲間の杜維明、William Chittickと共に、恐らく回儒の文献中最も難しい劉智の「天方性理」の講読を始めた。イスラームの宇宙論や形而上学が儒教用語で見事に表現されたこの書は、三年で初読を終えたが再読することに全員が賛成した。中国思想に熟達した上で初めてイスラーム思想を説明する回儒たちは両文化の立場を踏まえて、念入りに言葉を選んでいる。つまり彼らは既に(17-18c) 真の意味での"文明の対話"を実現していたのだ。私達は又三年かけて再読を終え出版の段階に入った。ふり返るとこの七年、専門も宗教も異なる三人が、お互いの意見を尊重し、一字一句粗末にせず討論し得たことは、この書を通して我々も又一種の文明の対話を成し遂げたことでもあるという喜びがあった。



「ユダヤ人の言語、隣接文化との歴史的習合」

日時：2007年12月8日10:00－18:00

開場：同志社大学今出川キャンパス寧静館5階会議室

3回目となるCISMORユダヤ学会議が12月8日に開催され、色々な研究機関から参加者が集まった。2005年度と2006年度の会議は、文献と様々な文化間の相互効果に焦点を当てた。

今回選ばれたトピックは、ユダヤ人が長い間使用してきた言語と、それに隣接する文化の言語であった。第1回目の会議から行われているように、1日を大きく三つのセッションに分け、ユダヤ人の歴史の三つの重要な時代を反映させた。

第1セッションでは聖書時代のヘブライ語に隣接する言語に焦点をあて、ヘブライ語聖書がエジプト人の影響を受けた形跡があるかどうかをテーマとした、エジプトの言語に関する笈川博一教授(杏林大学)による発表と、聖書時代とポスト聖書時代の研究において、今でもヘブライ語について2番目に重要であるアラム語の使用を論じた勝又悦子氏による発表が行われた。

第2セッションは中世のユダヤ人とアラブ・イスラーム文化間のつながりにあてられ、イスラームのルールの下でアラビア語を話すユダヤ人による科学的な著作の編集と翻訳に関する発表が三浦伸夫教授(神戸大学)によって行われた。

第3セッションでは、最初にアダ・タガー・コヘン教授(同志社大学)によるラディノ言語の簡単な説明があり、続いて中世と現代をつなぎ、広く使われているイディッシュ語に関する上田和夫教授(福岡大学)による発表と、特に今日のカナダにおけるフランス語を話すユダヤ人コミュニティに関する菅野賢治教授(東京都立大学)による発表がなされた。

会議が行われた日は、ハヌカーの週にあたり、世界中のユダヤ人が8日間毎晩ろうそくを灯して祭りを祝う。会議の中でドロン・B・コヘン氏がろうそくを灯し、お祝いをした。

次頁は発表のプログラムであり、会議内容はこの春CISMORより報告書として発行される。

(同志社大学大学院神学研究科教授 アダ・タガー・コヘン)



【セッションA：聖書時代におけるヘブライ語と隣接文化との接触】

司 会：越後屋 朗(同志社大学大学院神学研究科)

開会の言葉：アダ・タガー・コヘン(同志社大学大学院神学研究科)

発表1：笈川博一(杏林大学総合政策学部)

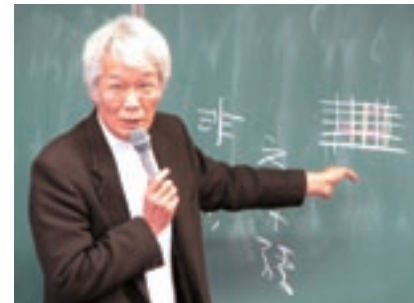
「アナスタシIにおけるセム語のエジプト語転写」

発表2：勝又悦子(日本学術振興会特別研究員)

「タルグムにおける十戒」

コメント：中村信博(同志社女子大学学芸学部)

市川 裕(東京大学大学院人文社会系研究科)



【セッションB：中世のユダヤ人とイスラーム・キリスト教のもとでのユダヤ人の諸言語】

司 会：小原克博(同志社大学大学院神学研究科)

発表1：三浦伸夫(神戸大学国際文化学研究所)

「中世ユダヤ文化と科学」

コメント：小林春夫(東京学芸大学教育学部)



【セッションC：文化的コンテキストにおけるユダヤ人の諸言語 ―中世から現代まで―】

司 会：アダ・タガー・コヘン(同志社大学大学院神学研究科)

司会者の言葉：「ラディノ言語との出会い」

発表1：上田和夫(福岡大学人文学部)

「ユダヤ語の発生と、近代におけるイディッシュ語の発展」

発表2：菅野賢治(東京都立大学人文学部)

「ユダヤ人とフランス語圏 ―フランスとカナダの比較―」

コメント：高尾千津子(北海道大学スラブ研究センター)

合田正人(明治大学文学部)



【閉会の言葉】

森 孝一(同志社大学大学院神学研究科)



部門研究 1・部門研究 2
合同研究会

第3回研究会 (2007年10月6日)

場所:同志社大学 東京オフィス

大セミナールーム

研究会テーマ「共存を妨げるもの ―イスラームの場合―」

「西欧社会は、なぜ自ら共生の道を閉ざすのか―9.11以前と以後―」

内藤正典 (一橋大学大学院社会研究科教授)

はじめに内藤氏は、西欧における国家構成員と「異質な存在」の関係について、次の三つの類型を提示した。(A)多文化主義型。複数の宗教・民族集団の並存を前提に、それらの棲み分けを行う。世俗主義を原則としない。UK、オランダがこの型。(B)国家原則・理念との契約型。契約によって宗教的・民族的な異質性が解消したとみなし、世俗主義を掲げる。フランスが該当。(C)異質な存在を想定しない型。ラント単位でのキリスト教会とのコンコルダートを容認し、キリスト教に特別な地位を与えている。ドイツが該当。

次に内藤氏は、三つのシステムに内在する排除の論理を指摘した。A型は、実際には「我々」と「彼ら」の境界の存在を前提とする。この境界が硬直化するとアパルトヘイトに酷似した事態が生じうる。B型は、契約に違反するものは排除する。この排除は正当化され、排外主義とは認識されない。C型は、異質な存在に対する原則がないため、その存在を後追いの的に認知することになる。結果、排除の論理は多様な形で現れる。

そして内藤氏は、9.11以前と以降の変化を、類型ごとに指摘した。A型のオランダでは、9.11後イスラモフォビアが噴出した。イスラームへの攻撃を主導したのはリベラル派(実質はリバタリアン)である。リベラル派は「我々」と「彼ら」の境界をイスラームが破壊したと認識し、「我々」の安寧を脅かすムスリムの排除を求める。多文化主義のジレンマと認識されているが、大きな混乱が生じた。B型のフランスは、理論面では9.11の影響はない。だが異質な存

在と国家原則・理念の間の齟齬に強く反応するようになった。宗教シンボル禁止法はその現れである。また異質な存在への規制強化が「テロとの戦い」の名目で行われている。さらにイスラームへの反撥がトルコのEU加盟反対という歪んだ形で現れた。C型のドイツも、理論面では9.11の影響はない。だが既存の排外主義が、宗教や価値・規範の相違に照準をあわせるようになった。排外主義は「我々」の民主的価値・規範に衝突するものとしてイスラーム・ムスリムを認識、差別を正当化した。また「民主的立法者」としてのラントが、スカーフ規制を法制化した。排外主義に抵抗してきた左派もこうした動きに同調、リベラルなベルリンなどの都市でも規制が強化された。さらにドイツ南部では、「我々」の象徴としてのキリスト教を前に出し、イスラームに敵対する動きがある。

最後に内藤氏は、EUがこの問題を解決するのは難しいと述べた。EUには加盟国内部の問題を軽減する論理、機能がない。「反・排外主義」や「寛容」を説いても、各システムで何を「寛容」とするか異なり、EUはこの相違を調整できない。ゆえにEUが容認する「文化の多様性」はイスラームには機能しにくい。また、これらの問題が重層的に2001年以降に現れたことが、トルコのEU加盟交渉の大きな障害となった。

(CISMORリサーチアシスタント・同志社大学大学院神学研究科博士後期課程 杉田俊介)

「イスラームにおける共存を妨げるもの」

中田 考 (同志社大学大学院神学研究科教授)

本研究会のテーマに即した議論を有効に進めるためには、まず「共存」という概念が成立する条件を明らかにしなければならない。というのも「共存」の意味するものがそもそも曖昧であり、古典イスラーム学においても「共存」をテーマにした研究は存在しないからである。ではどういった場合に「共存」を語ることができるのか?空間に関しては、二つ以上の「物(神学の伝統では空間を占めるもの)」が相互作用の可能な範囲内に存在していることが求められる。時間の共有は、「共存」の必要条件であるが、相互作用を可能にする一定の時間幅を同時に考慮しなければならない。「物」にやどる宗教・思想・文化といった「偶有」に関しては、同一の「物」に複数「共存」することができる。世界の存在者はすべて合成物なので、どの個体をとってもそれは複数の部分が共存した合成物であり、またどの個体も上位レ

ベルの存在者の構成要素として他の個体と共存関係を結んでいる。

「イスラームにおける共存を妨げるもの」を問うには、次のような設定が想定される。時間的にはムハンマドによるイスラーム開教から現在まで、空間的にはほぼ地表のすべてが対象となる。宗教は信徒などの「物」に宿り存在すると考えれば、歴史上イスラームは諸宗教の信奉者やその象徴と共存してきた。だが事実として「共存」が見られたとしても、それが本当に「イスラーム」であったのかは慎重に検討しなければならない。ただしイスラームは、一定の限度を超えない逸脱に関しては、その存在を許容する。

イスラーム法学では、地表を「イスラームの家」と「戦争の家」に大別する。前者は、ムスリム共同体全体の長カリフがイスラーム法にのっとり、外敵の侵略から領土を防衛し、住民の生命・財産・名誉を守り、宗教共同体ごとの自治を保障する空間であり、後者はそれ以外の無法地帯である。そして「イスラームの家」をジハードによって広げることが、カリフ制の理念でありイスラームの考え方である。ジハードの対象となった住民は、改宗してムスリムになるか、税を貢納し庇護民となるか、戦争をするかの選択を与えられる。ただしここでの戦争は法的な状態であり、必ずしも実際の戦争を意味するわけではない。

「イスラームにおける共存を妨げるもの」とは、カリフ制の不在により安定したイスラーム統治が妨げられている現状である。カリフ制が実現すれば現在テロと呼ばれる行為の予防も期待できる。イスラーム統治を拒む者は、自由や人権を謳う国々が無条件に受け入れるべきである。イスラームと共存するために非イスラーム世界に求められるのは、カリフ制の実現を妨害せず、人々の自由な移動を保障することである。

(CISMORリサーチアシスタント・同志社大学大学院神学研究科博士後期課程 原田恭介)

2007年度活動報告 (10月23日以降)

10月23日

アラブ・イスラーム学院と学術交流協定締結

12月8日

第3回CISMORユダヤ学会議

会場:同志社大学 今出川キャンパス 寧静館5階 会議室

12月23日

バーゲル・アル=オルム大学(イラン)と学術交流協定締結

1月12日

一神教学際研究センター・日本オリエント学会共催 公開講演会

「前3千年紀シュメール、多神教の世界」

発表:前田 徹(早稲田大学文学部教授)

会場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

2月18―19日、21―22日、25―26日

ヘブライ語インテンシブ・コース

2月22日

部門研究3 第2回研究会

「一神教と多神教 ―日本宗教の観点から―」

発表:末木文美士(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

2月27日・3月1日

アラビア語インテンシブ・コース

編集後記

ようやく『CISMOR VOICE』第8号をお届けすることが出来ました。同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)の広報誌として、センターの活動報告はもちろんのこと、一神教、広くは宗教に関する話題をなるべくわかりやすい形で提供するよう心がけてきました。読みやすく、かつ関心を持っていただけるように、毎号、ひとつの都市を取り上げ、特集を組んでいます。第4号では「一神教とは何か」という特集でしたが、他の号では、エルサレム、カイロ、ニューヨーク、京都(2号にわたり)、テヘランといった都市をクローズアップし、それぞれの都市と深いかわりを持つ方々に執筆をお願いしました。

今回、ヨーロッパの都市を取り上げるということで、どの都市にしようか、いろいろ悩みました。都市を選択する上でもっとも重要な要素となるのは、その都市について具体的に、興味深い記事を執筆してくださる方がいるかどうかということです。さらにヨーロッパに関しては、特集にしたい都市がたくさんあることも悩みの種となりました。いろいろと検討した結果、特に執筆者の点から、今号ではひとつの都市ではなく、三つの国、フランス、ドイツ、英国を取り上げることになりました。北欧、東欧、あるいはローマなどの都市についてもいつか特集を組みたいと考えています。

さて、『CISMOR VOICE』は広報誌ゆえにその配布方法がかなり限定されています。売り物ではないため、書店にはおいていません。主に、CISMORの講演会などの催しで配布されます。むしろ関心のある方に自由に取っていただくという形です。これまで多くの執筆者の方々にとっても面白く、ためになる記事を書いていただきました。編集担当者としては、是非とも一人でも多くの方に読んでいただきたいと思っています。そこで、裏表紙に第1〜7号の残部情報について載せました。ご希望の方にはお送りしますので、CISMORまでご連絡下さい。(ネアン)

来訪者記録

日付	氏名	所属機関	国名
2008年			
1月12日	前田 徹	早稲田大学文学部	日本

CISMOR事務局編集部

越後屋 朗 澤村容子 蜂須賀朋彦 藤川晶子 藤田敦子

発 行 同志社大学 一神教学際研究センター(CISMOR)

〒602-8580

京都市上京区今出川通烏丸東入

TEL 075-251-3972

FAX 075-251-3092

E-mail: info@cismor.jp

http://www.cismor.jp

編 集 CISMOR事務局編集部

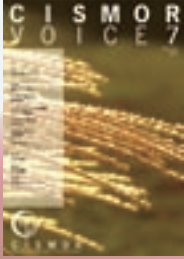
執筆協力 高田 太

デザイン 有限会社真之助事務所

印 刷 日本写真印刷株式会社



CISMOR VOICE バックナンバー

	CISMOR VOICE vol.1 特集：エルサレム 残部わずか		CISMOR VOICE vol.2 特集：カイロ ※残部なし
	CISMOR VOICE vol.3 特集：ニューヨーク 残部わずか		CISMOR VOICE vol.4 特集：一神教とは何か 残部わずか
	CISMOR VOICE vol.5 特集：京都 1 残部わずか		CISMOR VOICE vol.6 特集：京都 2 残部わずか
	CISMOR VOICE vol.7 特集：テヘラン 残部わずか	郵送をご希望の場合、ご希望の号数と冊数、 送付先を下記へご連絡ください。 無料で郵送いたします。 〒606-8233 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学 一神教学際研究センター TEL: 075-251-3972 FAX: 075-251-3092 Email: info@cismor.jp	